

“He was an excellent mimick”

『ガリヴァー旅行記』と模倣

木村 真理子

はじめに

1745年のスウィフトの死から数年後、彼の知人たちは相次いで、このアイルランドの偉大な風刺作家の伝記を執筆する。まず、スウィフトの没後評価の礎を築いたと言われているのが、Lord Orrery である。彼は、自身のジョンソン風事実重視の伝記の中で、スウィフトにまつわるあらゆる事実を——とりわけ、晩年のスウィフトを特徴づける、狂気や暴力性、虚栄心といったネガティブな側面までをも——忌憚なくさらけ出した (Cook 67-71)。この Orrery のスウィフト伝記に触発されたのが、Patrick Delany と Thomas Sheridan である (Cook 71-73)。Orrery のスウィフト評価を批判的に分析検証する両者は、先達が過剰なほど浮き彫りにした、厭世的なスウィフト像というものを払拭するため、作家の明るく陽気で、ひょうきんな側面を様々な角度から明らかにしている。

この両名が前景化した親しみやすいスウィフト像、それを象徴するのが、「模倣」、「ものまね」に興じるスウィフトの姿である。例えば、Delany は、「歌まね」を披露するスウィフトの姿を、以下のように記録している。

Though SWIFT had no skill in musick, nor ear for its beauties; yet he had ear enough, for a most ridiculous and droll imitation of it: ... SWIFT cried out, ... I'll sing it [voluntary] for you. And immediately sung out as ridiculous, and as lively an imitation of it as ever was heard: ... Upon which, the company burst into a loud pale of laughter. (Delany 190-191)

また Sheridan は、自身の父である Doctor Sheridan とスウィフトが、「人まね」を楽しむ様子を、このように書き残している。

A plan was immediately concerted between them [Swift and Doctor Sheridan], that Swift should personate the character of a distressed Clergyman, under the name of Jodrel, applying to Doctor Sheridan to be made one of his Ushers.... As he [Swift] was an excellent mimick, he personated the character of an aukward Country Person to the life. (Sheridan 341)

さらに、Sheridan は、スウィフトの知人である Mrs. Pilkington が、馬のように歩くスウィフトの姿を目撃したエピソードなども記載している。

She (Mrs. Pilkington) seated herself, and away the Dean walked, or rather trotted as hard as ever he could drive. She could not help smiling at his odd gait; for she thought to herself, he had written so much in praise of horses, that he was resolved to imitate them as nearly as he could. (Sheridan 414)

このように、「模倣 (imitation)」、「ものまね (mimic[ry])」という、シェリダンが言うところの「おふざけ (*bagatelle*)」(Sheridan 341) を無邪気に楽しむスウィフトの姿——とりわけ、馬のような歩き方をする彼の姿——、それはスウィフト自身が生み出した、ある人物を彷彿させるのではないだろうか。その人物とは、『ガリヴァー旅行記』(*Gulliver's Travels*, 1726) の主人公、ガリヴァーである。まさに今見た、伝記の中で描き出されるスウィフトの写し鏡のように、ガリヴァーもまた、自身の壮大な世界旅行において、行く先々で出会う様々な人間、動物の言語、所作、風貌、慣習、思考を、次から次へと目まぐるしく「模倣」、「ものまね」して行くのであった。したがって、シェリダンの言葉を借りるならば、作者スウィフト同様、ガリヴァーもまた、ある種の、「ものまね名人 (excellent mimick)」(Sheridan 341) であったといえるようである。

『ガリヴァー旅行記』研究において、この「模倣」という概念は、様々な論文において着目されている。例えば、Hawes は、異民族の模倣を主体的に試みるガリヴァーの姿は、被植民者に模倣を強要する植民者への風刺となっていると主張する。また、Ehrenpreis は、『ガリヴァー旅行記』が、異民族の模倣をナイーブに推奨する William Temple のエッセイ “Of Heroick Virtue” を批判的に発展させたものであると指摘する。さらには、『ガリヴァー旅行記』を題材に、スウィフトの科学観について論じる Patey の論文や、スウィフトの主要数作品とミメシスの関係について論じる Mackie の論文などでも、「模倣」という論点は、多角的に議論されている。しかし、これら多くの研究において、この論点自体が焦点化されるのはあくまでも部分的であり、そこから、

『ガリヴァー旅行記』全体が包括的に議論されている例というのは、ほとんど見当たらない。したがって以下では、『ガリヴァー旅行記』を「模倣」という論点から限定的に照射した場合、どのような議論が可能になるのか、それを検討してみたいと思う。それにより、『ガリヴァー旅行記』という作品が、「模倣」という概念を発端にした、人間性そのものに対する考察の舞台となっているということが明らかになるだろう。

「模倣者」としてのガリヴァー、スウィフト

Montag は、『ガリヴァー旅行記』と、その同時代作である『ロビンソン・クルーソー』を比較検証し、以下のように述べている。いわゆる「自然状態 (a state of nature)」に放置される「孤独な個人 (the solitary individual)」ロビンソンが、あらゆる物の「創造 (invent[ion])」を求められる一方、「人間社会 (human society)」という「満ち足りた空間 (spaces already full)」に辿り着くガリヴァーは、「既存の習慣・慣習 (already established practices and customs)」への「順応 (conform[ity])」を強いられるのであった (Montag 129)。ここで、Montag は、ガリヴァーの異国での、いわば生存戦略を、「順応 (conform[ity])」という言葉で言い表している。しかし、それをより具体的に表現するのであれば、それは、「模倣」と換言することができるのではなだろうか。というのも、ガリヴァーの異文化社会への順応、適応、ひいては同化は、異民族の言語、所作、風貌、慣習、思考の「ものまね」という、ある種の形式主義的な方法論をもって行われているからである。

例えば、いずれの旅においても、ガリヴァーが熱心に取り組む現地語の学習は、「模倣」を基盤に行われていた。特に、それはフウイヌム語学習において最も顕著に表れており、ガリヴァーは、「馬のいななきを真似することで (imitating ... the Neighing of a Horse)」(212)、フウイヌム語を習得していったと記されている。また、このある種の「ものまね」は、異民族の所作、態度にも適用され、例えば、ガリヴァーは、ブロボディンナグ風の「奇妙な見た目と所作 (odd Looks and Behaviour)」(134)、そしてフウイヌムのような「歩き方と動作 (Gait and Gesture)」(260)、「声と話し方 (the Voice and manner)」(260)を「模倣していた (imitate[d])」(260)と描かれている。さらには、異国の様々な習慣、慣習、文化に関しても、往々にして、ガリヴァーは、それらを見よう見まねで再現していた。そして最後に、異民族の思考、見解等も、ガリヴァーの「模倣」の対象となり、例えば、ブロボディンナグ国、フウイヌム国帰国後には、彼らの悲観的な人間観を見習うことで、自らも、一種の人間不信に陥るのであった(136, 199)。

つまり、「田舎者 (Country Person)」に扮した筆者スウィフトさながら、ガリヴァーもまた、異国の人間、動物に、「そっくりそのまま、なりきっていた (personated... to the life)」(Sheridan 341) ようである。

“I [Gulliver] boldly pronounced *Yahoo* in a loud Voice, imitating, at the same time, as near as I could, the Neighing of a Horse; at which they [Houyhnhnms] were both visibly surprized.” (212) まさに今、上でその一部を引用した、フウイヌム国に到着したばかりのガリヴァーが、彼らの言語を絶妙に真似する場面である。オックスフォード版の『ガリヴァー旅行記』において、その編者である Higgins は、この一文に以下のような興味深い注釈をつけている。「おそらく、アリストテレスの指摘 (『詩学』 1448^b6-7) 『人間は最も模倣を好むという点で、他の動物と異なる』を想起させるだろう (perhaps recalls Aristotle’s statement (*Poetics*, 1448^b6-7) that ‘man differs from the other animals in being the most imitative.’) (Gulliver’s Travels 343)。フウイヌム模倣をするガリヴァーの姿が、アリストテレスの『詩学』で展開される、いわゆるミメーシス論に着想を得た可能性が示唆されている。あくまでも、これは、フウイヌム国での一場面に付けられた注釈ではあるものの、上の議論に見たとおり、『ガリヴァー旅行記』全体を通して、確かにガリヴァーは「模倣を好む (imitative)」人物として描出されていることを踏まえると、それは、ある意味、作品全体に適用されうる、極めて重要な指摘であるように思われる。

そもそも、アリストテレスが定義するところのミメーシスとは、模倣対象の内側に宿る創造力、すなわち対象が帯びる気質や性質、情念や情動などの「模倣」、もしくは「再現」を意味していた (Butcher 107-119)。しかし、それは、往々にして、「平凡、もしくは低俗なコピー (a literal or servile copying)」(Butcher 115) と誤って解釈されるきらいがあるといわれている。実際に、イギリスでは、17世紀に、ギリシア語のミメーシスに、英語の「模倣 (imitation)」という短絡的な訳語が当てられたことを機に、18世紀、とりわけ世紀前半に、ミメーシスが「モデルのコピー (copying models)」であるという安易な解釈が普及していたといわれている (Draper 373-75)。具体的に言えば、当時、ミメーシスは、二つの誤った意味を与えられており、その一つが「行動や事物のコピー (a copy of actions and things)」、そしてもう一つが、「誰もが認める傑作のコピー (a copy of accepted masterpieces)」という意味であった (Draper 373)。そして、このように曲解・誤解されたミメーシス解釈の受容者であり、またその普及者が、当時の著名作家たち、すなわち、Samuel Johnson や Alexander Pope、そして Jonathan Swift であったといわれている (Draper 376-377)。

こうした指摘を踏まえたうえで、『ガリヴァー旅行記』、そしてスウィフト伝記の言説に立ち返ってみると、確かに、「模倣 (imitation)」「ものまね (mimic[ry])」という表現は、そのほとんどが、「行動や事物のコピー (a copy of actions and things)」という意味で用いられている。実際に、スウィフトの盟友の一人であり、またスクリブレルス・クラブの一員でもあった John Arbuthnot は、Higgins が引用するアリストテレスの一節を、以下のように言い換えてさえいる。「アリストテレス曰く、人間は、最もものまねを好む動物である (Aristotle saith, that man is the most mimic of all animals)」(Arbuthnot 472)。もはや、ミメシスは、「ものまね (mimic[ry])」と同義と捉えられていることが分かる。スウィフトも同様の解釈を共有していたことは、想像に難くないだろう。したがって、ガリヴァーが「イミテーションを好む (imitative)」という場合、それはあくまでも、「模倣 / ものまねを好む (imitative/mimic)」のであり、「ミメシスを好む (mimetic)」わけではないということは Higgins の指摘に付け加えておきたい。

もっとも、彼の指摘とは別に、「模倣」に傾倒するガリヴァーの姿が、古代ギリシアではなく、古代ローマの文人、ホラティウスの影響を受けていた可能性も否定できないようだ。ホラティウスと言えば、スウィフトが、その「名言 (a good tag)」(*The Corr*, vol. 1, 41) を頻繁に引用することで知られている。その数ある引用例の中で、特に本論が注目したいのは、群衆に関するある言及の中で引用されている、以下の一節である。

「羊の性質と同じように、人間は模倣しがちであるのだ、(隷属的な群衆という模倣者 (man is so apt to imitate, so much of the nature of sheep, (*imitatores, servum pecus*)))」(*The Works*, vol. 3, 254) ホラティウスは、先導者に追従する群衆を、「模倣者 (*imitatores*)」と言い表している。彼の言うところの模倣が、「アリストテレスがミメシスという語に込めた意味をもたず、たんに模倣、ものまね (手本をまねる) というその本来の意味で用いられている」(岡 342) という事実を考慮すれば、ガリヴァーという人物は、アリストテレス的、というよりはむしろホラティウスの意味での「模倣好き」、すなわち、まさに後者が呼称するところの「模倣者」ともいうことができるようである。

しかし、興味深いことに、ガリヴァーは、生粋の「模倣者」というわけではなかった。ガリヴァーが、バルニバービの首都ラガードにある研究所の見学に向かった際、ラガードの元知事ムノーディは、ガリヴァーの案内人に、このように彼を紹介していた。「(彼は) 研究開発をこよなく愛するお方です ([He is] a great Admirer of Projects)」(166)。すでに見たように、ガリヴァーが「開発 (Projects)」もしくは「創造 (invention)」¹ というよりは、むしろ「模倣」を好むとする本論の議論を踏まえると、ムノーディ

の見解が誤っている、というより、むしろその逆であるということはいうまでもない。しかし、このムノーディの発言を受けて、ガリヴァーは、このような一節を書き残している。「(それは) 必ずしも嘘ではない。というのも、私自身、若かりし頃は、一種の開発者であったからだ ([it] was not without Truth, for I had my self been a Sort of Projector in my younger Days)」(166)。ガリヴァーの知られざる過去が明かされる。彼はかつて、ラガードの研究者のような、ひいてはロビンソンのような「開発者 (Projector)」、「創造者 (inventor)」であり、そこから何らかの経緯で「模倣者 (imitatore)」へと転身・転向したのであった。

では、そんな、旧「開発者」、「創造者」であり、現「模倣者」であるガリヴァーという人物を生み出したスウィフト自身は、どのように(彼が解釈するところの)「模倣」という概念をどのように捉えていたのであろうか。Patey は、18 世紀前半の、いわゆる新旧論争において、スウィフトが、古典派の立場から、“芸術”より“科学”が重視される社会風潮に、すなわち「模倣 (imitation)」ではなく「立証 (demonstration)」に価値が置かれる傾向に、警鐘を鳴らしていたと指摘している (Patey 810-812)²。また、Mackie も、スウィフトのモダニティー批判の一つとして、「模倣の抑圧 (the repression of mimesis)」を挙げ、彼が、行き過ぎた啓蒙主義の中で、忘れ去られ、失われかけていた「模倣の力 (the power of mimesis)」の復活を希求していたと述べている (Mackie 359-362)。つまり、スウィフトが、「模倣」、「ものまね」という行為を、娯楽の一つとして純粋に楽しんでいたことは、冒頭のスウィフト伝記に見たとおりであるが、それだけでなく、彼は、その理想的価値というものも、確かに評価していたようである。

さらに、スウィフトの「模倣」への忠誠は、彼の政治思想からも読み取ることができよう。スウィフトの政治観の推移を略述すると、初期はホイッグ党に共感を抱いていた一方、1710 年以降はトーリー党との関わりを深めていったと言われている (DeGategno 5)。すなわち、1721-25 年にかけての『ガリヴァー旅行記』執筆時、スウィフトはトーリー党に近い立場にいたことが分かる (Higgins 144)。また、この従来の見解をよりラディカルに捉えた Higgins は、『ガリヴァー旅行記』において、ジャコバイトの思想に通じる部分が数多く見受けられることを根拠に、スウィフトを、事実上のトーリー・ジャコバイト作家とみなしているようである (Higgins 144-172)³。こうしたスウィフトの政治的保守主義、それは「模倣者」としての、ある種の、後ろ向きな態度とも通じるものがあるのではないだろうか。すなわち、闇雲な改革(名誉革命、ハノーファー家の王位継承)を否定し、古き良き伝統(由緒あるステュアート家)を保護しようとする姿勢、それはまさしく、極端な「開発」、「創造」を拒み、先人が築

いた礎の「模倣」を尊重する姿勢と重なるものがあるように思われる。

実際に、政治との関わりで言えば、Higgins は「開発者 (Projector)」、「創造者 (inventor)」を、ホイッグ党员のある種の比喻とみなしている⁴。では、この場合、「模倣者 (imitatore)」は、トーリー党员を意味しうるのであろうか。以下で詳述するが、ムノーディという「模倣」の価値を重んじる人物が「スウィフトのトーリー神話が生み出した、寛容で、保守的な田舎紳士の典型」(Lock 118-121) とみなされている事実を鑑みると、それもまた正しいようである。すなわち、『ガリヴァー旅行記』執筆時、言い換えれば、トーリー党時代のスウィフトは、確かに「模倣者」であるといえ、彼の革新から保守への転向は、「開発者」、「創造者」から「模倣者」への転向とも換言できるようである。さらに、先述したように、そのスウィフトの手により生み出されたガリヴァーもまた、同様の変節を遂げていた。この点を踏まえると、やはりガリヴァーという人物に、筆者スウィフトの面影を感じざるを得ないであろう⁵。いずれにせよ、特筆すべきは、『ガリヴァー旅行記』執筆当時のスウィフト、そして世界旅行当時のガリヴァー、それはいずれも「最も模倣を好む」、「模倣者」であったということである。

模倣と人間性

「人間は最も模倣を好むという点で、他の動物と異なる (‘man differs from the other animals in being the most imitative.’)」(*Gulliver's Travels* 343)。すでに前章で引用した、アリストテレスの一節である。ここで改めて、この一節の意味を再考すると、アリストテレスは、人間の「模倣」を好む傾向が、その人間性を決定づけると考えていたことが分かる。この古代ギリシアの哲学者を「この世で最も偉大な論理の師 (the greatest master of arguing in the world)」(*The Works*, vol. 8, 153) と称えるスウィフトは、当然ながら、彼の人間観というものも受容していたはずである。さらに、同じく上に記した、スウィフトの以下の一節——「羊の性質と同じように、人間は模倣しがちであるのだ、(隷属的な群衆という模倣者) (man is so apt to imitate, so much of the nature of sheep, (*imitatores, servum pecus*))」(*The Works*, vol. 3, 254) ——からも、ホラティウスの影響を受けたスウィフトが、「模倣」というものを、人間特有の傾向と捉えていたことが分かる。つまり、スウィフトは、人間という名の動物に、終始翻弄されていたと言われているが、少なくとも、それが「最も模倣を好む」、「模倣者」であるという点においては、確信していたようである (Fussell 74)。

実際に、『ガリヴァー旅行記』では、ガリヴァーをはじめとして、多くの「模倣者」が登場する。例えば、プロブディンナグの国王は、その代表格として挙げられるだろう。王は、ガリヴァーと対談した際、開口一番、このような言葉を口にしていた。「模倣に値するものには、喜んで耳を貸そう（‘[I] should be glad to hear of any thing that might deserve Imitation.’）」(116)。実際に、この言葉通り、王は、しかるべき模範を探すため、ガリヴァーの話を傾聴していた。“the King heard the whole with great Attention; frequently taking Notes of what I [Gulliver] spoke, as well as Memorandums of several Questions he intended to ask me.” (117) また、ラガードの元知事ムノーディもまた、前者と同様の価値観を持っていたようである。彼のいわば人生哲学というものを、ガリヴァーは以下のように纏めている。“as for himself, being not of an enterprizing Spirit, he was content to go on in the old Forms; to live in the Houses his Ancestors had built, and act as they did in every Part of Life without Innovation.” (165) つまり、ムノーディが理想とするのは、画期的で新しい生活様式の「創造」ではなく、先祖伝来の生活様式の「模倣」であった。すなわち、彼もまた、典型的な「模倣者」であったといえるようだ。

一方、こうした「模倣を好む」、というよりはむしろ、その能力を賦与された人間と対照的なのが、馬（フウイヌム）である。先述したように、彼らは、フウイヌム国に到着したばかりのガリヴァーが、彼らの言語を鮮やかに模倣して見せる姿に驚きを隠せないでいた (212)。またその後も、「フウイヌムのように話すことができる、驚くべきヤフー（a wonderful Yahoo, that could speak like a Houyhnhnm）」(219) と、ガリヴァーの「ものまね」の才能を絶賛している。なぜ、彼らはこれほどまで、ガリヴァーの「模倣」という妙技に衝撃を受けているのか。それは、Higgins も、まさに上記の場面にアリストテレスの、かの一節を付記しているように、馬は、人間と違い、高度な模倣能力を持たないからである。事実、ガリヴァーが、フウイヌムの美徳や慣習の「模倣（Imitation）」を訴えかけるのに対し (251)、フウイヌムは、ガリヴァーが語る、イギリスの文化、社会、政治制度を見習う意欲を示すことは全くない。むしろ、そんなガリヴァーの話に、何度も「口を挟み (interpose)」（226）、「割り込んでくる (interrupt)」（226）彼らの姿は印象的である。すなわち、極端に言えば、Mackie も指摘するように、「フウイヌムは、模倣ができない (Houyhnhnms cannot mime)」のである (Mackie 366)。

しかし、そんなフウイヌムに仕えるヤフーに関して言えば、彼らは、少なからず、「模倣者」としての片鱗を覗かせていたようである。ガリヴァーが、ヤフーの群れに近づいた際、以下のような興味深い出来事が起きていた。“they[Yahoos] would approach

as near as they durst, and imitate my Actions after the Manner of Monkeys, but ever with great Signs of Hatred.” (247) フウイヌムの動作を真似するガリヴァーのように、ヤフーもまたガリヴァーの仕草を真似していたのである。すでに見たように、「模倣」という能力が、人間性の証であるとすれば、この些細な一幕を根拠に、ヤフーは確かに、人間的、すなわちガリヴァーと同類であると言えるのではないだろうか。実際に、ガリヴァー自身も、“they [Yahoos] had some Imagination that I was of their own Species” (247) と述べている。しばしば、ガリヴァーとヤフーの「生物学的類似性 (biological kinship)」 (*Gulliver's Travels* 352) というものは、上記の引用部の直後に描かれる、雌ヤフーがガリヴァーに発情する場面に見出されている⁶。しかし、「模倣」という観点から、両者の関係性を再考すると、それは、かの有名な一幕以前に、すでに明瞭、明確に描き出されているといっても過言ではないようだ。

このように、『ガリヴァー旅行記』において、「模倣」、「ものまね」という行為は、人間という動物とその他の動物を峻別する、ある種の試金石となっているようである。しかし、それは作品において、単純に美化、称揚されているかという点、必ずしもそうではないようだ。この事実を明らかにするため、ここではまず、ブロブディンナグ国で起きた、ある滑稽な出来事について触れておきたい。ある日、ガリヴァーが、住処としていた籠の中でくつろいでいると、突如、目の前に猿が現れ、彼はその動物に連れ去られてしまう。その時の様子を、ガリヴァーは、このように書き記している。“he [Monkey] took me for a young one of his own Species, by his often stroaking my Face very gently with his other Paw.” (111) なぜ、猿はガリヴァーを、同類の生き物とみなしたのであろうか。作中では、これ以上の踏み込んだ言及はなされていないものの、作品外のスウィフトの言説を参照すると、その理由は一目瞭然である。すなわち、両者はともに、「模倣を好む (mimic)」 (*The Works*, vol. 15, 200) という点において、同類であったのだ。

例えば、スウィフトは、ある書簡の中で、猿の比喩を用いて、「政治家 (folks)」を以下のように風刺している。“The folks here, whom they call a Parliament, will imitate yours in everything, after the same manner as a monkey doth a human creature.” (*The Corr*, vol. 5, 178) またある作品の中でも、同様の比喩を用いて、「気取り屋 (coxcombs)」を、以下のように揶揄している。“how industrious they [coxcombs] seem to mimic the appearance of monkeys, as monkeys are emulous to imitate the gestures of men.” (*The Works*, vol. 9, 333) さらに、『ガリヴァー旅行記』においても、まさに、先に引用した一節の中で、ヤフーは、ガリヴァーを、「猿のように (after the Manner of Monkeys)」 (247) 真似していたと

描かれていた。猿が「模倣を好む動物 (mimic animal)」（*The Works, vol. 15, 200*）であるという認識は、おそらく、スウィフトが、その虜となっていたと言われている大衆娯楽、「猿、類人猿ショー (monkey and ape shows)」——猿、類人猿が、人間の「ものまね」を披露する見世物——を通して得られたものであろう (Todd 258)。いずれにせよ、確かなのは、スウィフトが、少なからず、「模倣」、「ものまね」という技巧を、猿という動物と関連付けられていたということである。

このように、テキスト内外のスウィフトの言説に着目すると、彼の「模倣」に対する新たな見解が見えてくるのではないだろうか。すなわち、ガリヴァーの「ものまね」は、もはや、猿の「猿まね」と同等のものともみなされ、ある意味、軽蔑、侮蔑、ひいては、風刺の対象となっていたともいえるようである。とはいえ、この「模倣者」に対するスウィフトの冷ややかな眼差しが、いわゆる彼の「人間嫌い (misanthropy)」（*The Corr; vol. 3, 277*）に直結するものであるとっては早計であろう⁷。なぜなら、彼は、あくまでも、人間（霊長類）の本質——すなわち、能力に限界がある生き物は、「模倣」に頼らざるを得ないという事実——を冷静に見つめているにすぎないからである (Patey 812)。そして、この屈辱的な現実を受け入れたうえで、それと向き合うために彼が選んだ方法、それは「模倣」、「ものまね」をするガリヴァーを通して風刺的に、さらには、そんな彼自身を通して自虐的に、そのありのままの人間の姿を笑い飛ばすことであったようだ。Monk も指摘するように、「スウィフトが望むのは、我々の頭をかき乱すことではない。我々を笑わすことなのである。」 (Monk 49)

しかし、その人間という名の「模倣者」が、その生来の能力に抵抗する場合、スウィフトは、それを、一笑に付すことはできなかったようだ。「模倣者」ガリヴァーの、ラピュータ人、そして彼らが支援するラガードの研究者、すなわち「開発者」、「創造者」に対する態度は、実に辛辣であった。例えば、ガリヴァーという異人を模範とするどころか、彼に全く関心を示すこともないラピュータ人を見たガリヴァーは、自らも、彼らの「模倣」を即座に中断する。また、彼は、ラガードの研究所における創造的な実験にも、ほとんど関心を示すことはなく、“I saw nothing in this Country that could invite me to a longer Continuance” (179) といった捨て台詞を残し、足早にその地を去ってゆく。良くも悪くも「模倣」の生き物でしかない人間が、身の程知らずの「開発」、「創造」に走ることは、許しがたい行為であったのだ。事実、Patey も、「開発者」、「創造者」が「人間の能力の本質とその限界を見誤っている」と断じている (Patey 818)。こうした、ラガードの研究者、そして彼らの後援者であるラピュータ人に対する批判、それはすなわち、「模倣」の価値を蔑ろにする現代派、ひいては、それを後押しする、

「ジョージ一世のホイッグ系宮廷 (George I's Whig Court)」(Higgins 177) への当て擦りとなっているようである。

そして特に、この罪深き「開発者」、「創造者」への批判を鮮明にするのが、作品の節々で描かれている、外国語を巧みに操るガリヴァーの姿であったようだ。前章でも指摘したように、ガリヴァーの言語学習は「模倣」を基盤に行われていた。彼は、外国語の表現、発音、アクセント等を、忠実に「ものまね」することで、様々な言語の習得を試みていたのである。一方、それと対照的なのが、ラガードの研究所で開発途上の言語習得法——大がかりな機械で手軽に知識を身につける方法や、会話を短くする方法、言語ではなくモノで会話をする方法 (171-173) など——である。そこでは、まさに Mackie が指摘するように、「すべての模倣は排除され (obliterates all mimesis)」(Mackie 369)、そして Patey も示唆するように、「模倣 (imitation)」ではなく「立証 (demonstration)」に価値を置く学習法が企画されていた。しかし、皮肉にも、これらの革新的な実験は、「一向に完成を迎えることはなかった (are yet brought to Perfection)」(165) といわれている。ガリヴァーが、「模倣」、「ものまね」という、ある種の古典的学習法で、多種多様な言語を迅速に習得していたことを思い出せば、そんなガリヴァーの姿そのものが、まさに荒唐無稽な現代的発想それ自体に対する、痛烈な皮肉となっていたともいえるようである。

そして、この「模倣者」としての本分に抗おうとする人間の、もう一つの明示的な例、それが他にもない、「自然が生んだ完全者 (*the Perfection of Nature*)」(219)、すなわちフウイヌムへの接近を試みるガリヴァー自身の姿であった。前述したように、ガリヴァーは、ヤファーという存在を介し、自らの紛れもない人間性を突きつけられる。しかし、この身も蓋もない現実に直面してもなお、ガリヴァーは必死で、その事実を否定し続けた。皮肉にも、そのために彼が取った行為、それが最も「人間らしい」ものであった。すなわち、「模倣」である。すでに冒頭で見たように、ガリヴァーは、フウイヌムの「歩き方と動作 (*Gait and Gesture*)」(260)、「声と話し方 (*the Voice and manner*)」(260)、そして、彼らの思考、見解を、ひたむきに真似していた。実際に、Mackie も同様の点に着目し、このように看破している。「悲劇的にも、ガリヴァーは、自らの人間性を放棄するために、彼の最も人間的なもの——模倣能力——を発揮することとなった」(Mackie 365)。フウイヌムに近づこうとすることが、最もフウイヌムから遠ざかることとなり、また人間から遠ざかるように、最も人間に近づくこととなる。この究極のパラドックスを孕むのが、ガリヴァーのフウイヌム模倣であった。

しかし、言うまでもなく、ガリヴァーにとって、フウイヌム化は、やはり及ばね鯉の滝登りに過ぎなかったようである。話を少し進め、ガリヴァーのフウイヌム国帰国後の場面に注目すると、フウイヌム化したガリヴァーを見た周囲の人間は、彼が「理性 (Reason)」(268) を失ったとみなしていた⁸。すなわち、「模倣」は「理性」に反する行為として解釈されているようである。しかし、繰り返すように、いわば「猿まね」に過ぎない、この反理性的な「模倣」を運命づけられた生き物が、人間なのである。したがって、彼らが、フウイヌムのような、「模倣」をしない、そして、それができない生き物になることは、到底不可能であったのだ。言い換えれば、ガリヴァーのような、「理性的な能力 (*rationalis capax*)」の動物は、フウイヌムのような「理性的動物 (*animal rationale*)」になることはできないのである (*The Corr*; vol. 3, 277)。『ガリヴァー旅行記』の狙いは、まさに、この人間を「理性的動物 (*animal rationale*)」とみる、ストア派哲学の誤謬を暴くことにあったという事実を踏まえれば、フウイヌム化の限界を描くことは、ある種の、理性、啓蒙主義批判であるともいえるだろう⁹。いずれにせよ、Realも指摘するように、「ガリヴァーが、理性的な共同体の一員となることは不可能であり、そしてそれは、望ましいことでもなかったのだ」(Real 98)。

事実、このフウイヌム模倣の不可能性は、いかにも風刺小説らしい、皮肉めいたある表現で、確かに暗示されていたようである。フウイヌム国渡航記では、*inimitable* という形容詞が幾度か用いられている。例えば、フウイヌムの詩作は、「類を見ない (*inimitable*)」(255)と表現され、さらには、彼ら自身も、「比類なきフウイヌム (*inimitable Houyhnhnms*)」(265)と呼称されている。その言葉が、フウイヌムへの賛辞となっていることは言うまでもないだろう。しかし、それは同時に、彼らの恐るべき超越性をほめかす警句ともなっていたようである。すなわち、ガリヴァーにとって、フウイヌムは、あまりにも「偉大である (*inimitable*)」がゆえ、文字通り「真似できない (*inimitable*)」——*incapable of being imitated; surpassing or defying imitation (OED)*——存在であるのだ。ガリヴァー、スウィフトは、確かに、この玉虫色の表現で、フウイヌム模倣の無謀さに、警鐘を鳴らしていたようである。以上全てを明確に物語るのは、Damroschの以下の一節であろう。「では、私たちはフウイヌムのようになりうるのか？ そうはいかない、なぜならそれは不可能であるからだ。そして、ガリヴァーのフウイヌム化の試みは絶望的であるのだ」(Damrosch 378)¹⁰。

あくまでも、「最も模倣を好む」、「模倣者」に過ぎない人間は、その「模倣者」としての一線を越えることはできず、そして超えてはいけないのである。スウィフトは、ラピュータ人、ラガードの研究者を批判的に描くことで、そして、フウイヌムへの同

化を試みるガリヴァーの、悲劇的な末路を描くことで、「模倣者」以上の存在を目指し、そして「模倣者」を超越したと慢心する人間の、その「罰当たりなうぬぼれ (blasphemous pride)」 (*Gulliver's Travels* 359) に釘を刺しているようである。したがって、当然ながら、人間という「模倣者」が模範とすべきは、「開発者」、「創造者」でも、「自然が生んだ完全者」でもなく、やはり、人間としての分をわきまえた「模倣者」だけであった。実際に、ガリヴァーは、ブロボディンナグ王が「人間の模範 (a Standard for all Mankind)」 (122) となると称え¹¹、そして、その国の模範的な慣習に目を向けるよう促している (273)。さらには、ラピュータ人が「悪しき模範 (ill an Example)」 (164) とみなすムノーディもまた、ガリヴァーにとっては、すなわち「良き模範」であったといえるだろう¹²。つまり、人間の鏡となりうるのは、あくまでも、等身大の人間、すなわち「模倣者」に限るのであった。

実際に、『ガリヴァー旅行記』という作品外においても、スウィフトは数多くの「良き模範」の「模倣」を促していた。例えば、スウィフトと恋仲にあったといわれている Mrs. Johnson への祈りの中では、彼女が、人類の「永続的な模範 (constant imitation)」となることを認め、(*The Works*, vol. 9, 300)、また、ロンドン市長に宛てた書簡の中でも、彼が、後代の「模倣に適した、価値ある模範 (a worthy pattern for the imitation)」 (*The Corr*; vol. 4, 368) となると称えている。そして極め付きには、自身の墓碑銘において、彼自身を模範とするよう、後世に訴えかけている。

SWIFT has sailed into his rest;
Savage indignation there
Cannot lacerate his breast.
Imitate him if you dare,
World-besotted traveller; he
Served human liberty.
(Yeats, *Selected Poems* 131)¹³

そこに、スウィフトらしさを特徴づける、挑発じみた皮肉や辛辣さは存在しない。まもなく命尽きようとする人間が、後世に向けて発した真摯な訴え、それがスウィフトの墓碑銘であった (Johnson 827)¹⁴。たとえ、「模倣」という行為が、恥ずべきものであったとしても、やはりスウィフトは、文字通り最後まで、その価値を信じていたようである。以上、本論で検討してきた内容を踏まえると、以下のような結論が導き出

せるのではないだろうか。スウィフト、そして彼のいわば分身であるガリヴァー、彼らは、自らの紛れもない人間性、人間らしさ、言い換えれば、自身が「最も模倣を好む」、「模倣者」であるという事実を、後ろめたくも、だが確かに前向きに認め、そして、その人間という生き物が人間らしく、すなわち「模倣者」が「模倣者」らしく謙虚に生きるよう促すのが『ガリヴァー旅行記』という作品であった。

おわりに

スウィフトは、「パペットショー (*The Puppet-Show*)」という短詩の中で、人間の身なり、話し方、行動を真似るパペットを「ものまね集団 (*mimic race*)」(*The Works, vol.14,223*) と言いつづけている。『ガリヴァー旅行記』の主人公ガリヴァーは、まさに、この集団の一員であったといえるようだ。彼もまた、作家スウィフトのパペットであり、そして、自身の世界旅行において、異国の人間、動物を、ひたすら「模倣」、「ものまね」していくからである。興味深いことに、そんなガリヴァーの生みの親である作者スウィフトもまた、「模倣」の美的、哲学的、そして政治的価値を認める「模倣者」であったことを思い出せば、ガリヴァーという名の「操り人形」に、スウィフトという名の「操り人」のイメージを、はからずも重ねざるを得ないだろう。

『ガリヴァー旅行記』では、この「模倣」という能力は、人間の人間性を決定づける要素と捉えられていた。したがって、その人間という名の、いわば「模倣者」が、その生得的な能力を放棄し、そして能力以上の存在を目指すことは許されず、その分不相応な欲望の先に待つのは絶望のみであった。確かに、「模倣者」としてのガリヴァーの姿に、スウィフトの悲観的な人間観が、多少なりとも、透けて見えてくることは否めないだろう。しかし、最終的に、スウィフト、そしてガリヴァーが望むのは、人間が謙虚に、その人間性、人間らしさを全うすること、すなわち「模倣者」もしくは「自然が生んだ不完全者」が、自らに与えられた唯一無二の能力に、忠実に従うことであったようだ。

冒頭でも触れた、スウィフト伝記執筆者の一人である Delany は、「模倣」という「おふぎけ (*bagatelle*)」に関するスウィフトの見解を以下のように代弁している。「彼 (スウィフト) の忌まわしき格言である『おふぎけ、万歳!』 (*his [Swift's] detestable maxim of vive la bagatelle!*)」(Delaney 142)。「模倣を好む」人間の性、それは、スウィフトにとって、忌むべきものであると同時に、讃えられるべきものであったようだ。この

Delany が引用する一節は、スウィフトのアンビバレントな模倣観の核心を見事についているように思えてならない。

注

1. Higgins は「開発者 (PROJECTORS)」（164）を “inventors or planners of political, social, financial, or scientific schemes” (*Gulliver's Travels* 326) と定義し、「開発 (Project)」を「創造 (invention)」と、また「開発者 (PROJECTOR)」を「創造者 (inventor)」と、ほとんど同じ意味で捉えている。
2. 現代派は、科学と芸術（いわゆる現在の科学と芸術）という学問の分類法を、また一方、アリストテレスの古典派は、“科学”（確実であり、人間の能力内、ゆえに立証が可能である学問）と“芸術”（不確実であり、人間の能力外、ゆえに模倣が求められる学問）という分類法を支持していたといわれている (Patey 812)。
3. トーリーとは、チャールズ二世を支持し、1679 年から 1681 年にかけての王位排除法案において、世襲による王位継承を支持していた政党である。そして、1688 年から 1689 年にかけての名誉革命後に、その中で生まれた党派の一つがジャコバイトであった (*Gulliver's Travels* 307)。
4. Higgins は「私自身も、若かりし頃は、一種の創造者であった (I had my self been a Sort of Projector in my younger Days)」（166）という一節に、「1701 年、スウィフトは、少なくとも名目上は、ホイッグ党員であった (Swift was at least nominally a Whig in 1701.)」 (*Gulliver's Travels* 327) という注釈を付けている。
5. 例えば、Ehrenpreis は、ガリヴァーをスウィフトの「代弁者 (mouthpiece)」（Ehrenpreis 451）と、また Rawson も、ガリヴァーを含めた多くのスウィフト作品の語り手は、スウィフトの「代弁者 (spokesmen)」（Rawson, “Gulliver and Others” 491）であると指摘している。
6. 例えば、Nuttall や Hunting も、Higgins と同様の見解を示している (Nuttall 54; Hunting 112)。
7. スウィフトは Alexander Pope に宛てた書簡の中で、自身の人間観を以下のように述べている。“I have ever hated all nations, professions, and communities, and all my love is toward individuals: for instance, I hate the tribe of lawyers, but I love Counsellor Such-a-one, and Judge Such-a-one: so with physicians – I will not speak of my own trade – soldiers, English, Scotch, French, and the rest. But principally I hate and detest that animal called man, although I heartily love John, Peter, Thomas, and so forth. This is the system upon which I have governed myself many years, but do not tell, and so I shall go on till I have done with them. I have got materials toward a treatise, proving the falsity of that definition *animal rationale*, and to show it would be only *rationis capax*. Upon this great

foundation of misanthropy, though not in Timon's manner, the whole building of my Travels is erected; and I never will have peace of mind till all honest men are of my opinion.” (*The Corr*, vol. 3, 277)

8. ブロブディンナグ国帰国後も同様に、ブロブディンナグ化したガリヴァーを見た祖国の人間は、彼が「理性 (Wits)」を欠いているとみなしていた (137)。
9. Wedel は、ストア派に代表される理性主義への批判を『ガリヴァー旅行記』に読み取っている。また、スウィフトの「理性的動物 (*animal rationale*)」に対す見解については注釈 8 の引用部参照。
10. 例えば、Rawson も同様に、「フウイヌムは、人間のあるべき姿の表象ではなく、人間ではないものの表象である」(Rawson, *Gulliver and the Gentle Reader* 31) と述べている。
11. Higgins は、ブロブディンナグ王を「賢人王の典型 (*the paradigm of the good King*)」と称している (*Gulliver's Travels* 306)。
12. Patey 曰く、「ムノーディは、良き模範を模倣することで、彼自身が、模倣に値する良き模範となるのである」(Patey 823)。
13. W. B. Yeats は、ラテン語で書かれたスウィフトの墓碑銘を英訳し、それを「歴史上最もすぐれた墓碑銘 (*the greatest epitaph in history*)」と讃えている (Yeats, *Wheels* 15)。
14. 墓碑が旅人に語りかけるという形式は、古代ローマの墓碑銘の慣習に倣ったものであり、それが故人を模範とするよう促すことは、当時のイギリスでも珍しくはなかった (Johnson 823)。

引用文献

- 松本仁助、岡道男訳。(1997)『アリストテレース詩学、ホラーティウス詩論』岩波書店。
- Arbuthnot, John. *The Life and Works of John Arbuthnot*. Edited by George A. Aitken, Clarendon Press, 1892.
- Butcher, S. H. *Aristotle's Theory of Poetry and Fine Art: With a Critical Text and a Translation of the Poetics*. Macmillan, 1895.
- Cook, Daniel. "Lord Orrery's 'Remarks on Swift' and literary biography after 1750." *Eighteenth-Century Ireland*, vol. 28, 2013, pp. 62-77.
- Damrosch, Leo. *Jonathan Swift: His Life and His World*. Yale UP, 2013.
- DeGateno, Paul J, and R. Jay Stubblefield. *Critical Companion to Jonathan Swift: A Literary Reference to His Life and Works*. Facts on File, 2006.
- Delany, Patrick. *Observations upon Lord Orrery's Remarks on the Life and Writings of Dr. Jonathan Swift*. W. Reeve and A. Linde, 1754.
- Draper, John W. "Aristotelian 'Mimesis' in Eighteenth Century England." *PMLA*, vol. 36, no. 3, 1921, pp.

372-400.

- Ehrenpreis, Irvin. "Show and Tell in Gulliver's Travels." *Swift Studies* 8, 1993, pp. 18-33.
- Fussell, Paul. "The Paradox of Man." *Jonathan Swift*. Edited and with an Introduction by Harold Bloom, Chelsea House, 1986, pp. 73-81.
- Johnson, Maurice. "Swift and 'The Greatest Epitaph in History'." *PMLA*, vol. 68, no. 4, 1953, pp. 814-827.
- Hawes, Clement. "Three Times Round the Globe: Gulliver and Colonial Discourse." *Cultural Critique*, no. 18, 1991, pp. 187-214.
- Higgins, Ian. *Swift's Politics: A Study in Disaffection*. Cambridge UP, 1994.
- Hunting, Robert. *Jonathan Swift*. Twayne, 1989.
- Lock, F. P. *The Politics of Gulliver's Travels*. Clarendon Press, 1980.
- Mackie, Erin. "Swift and Mimetic Sickness." *The Eighteenth Century*, vol. 54, no. 3, 2013, pp. 359-373.
- Monk, Samuel H. "The Pride of Lemuel Gulliver." *The Sewanee Review*, vol. 63, no. 1, 1955, pp. 48-71.
- Montag, Warren. *The Unthinkable Swift: The Spontaneous Philosophy of a Church of England Man*. Verso, 1994.
- Nuttall, A. D. "Gulliver among the Horses." *The Yearbook of English Studies*, vol. 18, Pope, Swift, and Their Circle Special Number, 1988, pp. 51-67.
- Patey, Douglas Lane. "Swift's Satire on 'Science' and the Structure of Gulliver's Travels." *ELH*, vol. 58, no. 4, 1991, pp. 809-839.
- Rawson, Claude. *Gulliver and the Gentle Reader: Studies in Swift and Our Time*. Humanities Press, 1991.
- . "Gulliver and Others: Reflections on Swift's 'I' Narrators." (Revised and corrected version of "Gulliver and Others: Reflections on Swift's 'I' Narrators," originally published in *Swift: The Enigmatic Dean: Festschrift for Hermann Josef Real*, ed Rudolf Freiburg, Arno Löffler, and Wolfgang Zach, with the assistance of Jan Schnitker. Tübingen: Stauffenburg-Verlag, 1998, 231-46.)
- Real, Hermann J. "Voyages to Nowhere: More's *Utopia* and Swift's *Gulliver's Travels*." *Eighteenth-Century Contexts: Historical Inquiries in Honor of Phillip Harth*, 2001, pp. 96-113.
- Sheridan, Thomas. *The Life of the Rev. Dr. Jonathan Swift, Dean of St. Patrick's Dublin*. J. F. and C. Rivington, 1787.
- Swift, Jonathan. *Gulliver's Travels*. Edited with an Introduction by Claude Rawson and Notes by Ian Higgins, Oxford UP, 2008.
- . *The Correspondence of Jonathan Swift, D.D.* Edited by F. Elrington Ball and with an Introduction by J.H. Bernard, 6 vols, G. Bell, 1910-1914.
- . *The Works of Jonathan Swift, D.D., Dean of St. Patrick's, Dublin: Containing Additional Letters, Tracts, and Poems, not Hitherto Published: with Notes, and a Life of the Author*. Edited by Sir Walter Scott, Bart, 19 vols, Archibald Constable and Co. and Hurst, Robinson, and Co., 1824.

Todd, Dennis. "The Hairy Maid at the Harpsichord: Some Speculations on the Meaning of Gulliver's Travels."

Texas Studies in Literature and Language, vol. 34, no. 2, 1992, pp. 239- 283.

Yeats, William Butler. *Selected Poems and Two Plays of William Butler Yeats*. Edited and Introduction by,

M. L. Rosenthal, Collier Books, 1967.

---. *Wheels and Butterflies*. Macmillan, 1934.

Wedel, T. O. "On the Philosophical Background of 'Gulliver's Travels'." *Studies in Philology*, vol. 23, no.4,

1926, pp. 434-450.